

石原吉郎におけるキリスト教詩の研究

「サンチョ・パンサの帰郷」を巡って

柴崎 聡

日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study of Christian Poems by ISHIHARA Yoshiro

Mainly on 'Homecoming of Sancho Panza'

SHIBASAKI Satoshi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Ishihara Yoshiro is one of the most famous Japanese poets. In 1938 he was baptized by Egon Hessel, a disciple of Karl Barth. He was drafted by the Japanese army in 1939. After the war, he was arrested by the Soviet Union, sentenced to 25 years at hard labour, and sent to a concentration camp in Siberia.

After coming back to Japan in 1953, Ishihara wrote many poems and essays. I am sure that almost all of his literary works are based on his experience in Siberia. Many critics have evaluated his works from this perspective. They are correct in a sense, but their approach is not sufficient. For in order to have a full understanding of Ishihara's world of poetry, we have to examine each poem closely from the perspective of Christianity and the Bible.

In this paper, I have confined my efforts to the interpretation of the poem 'Homecoming of Sancho Panza.' As a result, I have found that this poem consists of three layers and that the core of Ishihara's thought is embodied by the technique of his way of representation.

はじめに

戦後になって本格的に文学活動を始めたキリスト者詩人のうち、^{あんざいひとし}安西均(1918—1994年)と^{いしはらよしろう}双璧をなすのは石原吉郎である、と断言することに私はいささかの躊躇も覚えない。その石原は、生前も死後も、シベリヤ体験、それもシベリヤの強制収容所体験の視点から論じられることが圧倒的に多かった。それらは貴重な論述であり論考ではあるが、それだけで石原を捉えきることが果たしてできるであろうか。

私は、この論文において、彼の作品に見え隠れするキリスト教と聖書の影響を一つの詩作品を通して検証していきたいのである。その前に彼の経歴を瞥見しておきたい。

石原吉郎は、1915年、静岡県伊豆^{とひ}土肥村(現・土肥町)に生まれた。1934年、東京外国語学校

(現・東京外国語大学)ドイツ語部に入学し、マルクシズム、エスペラント語に興味を持つ。北条民雄の小説『いのちの初夜』に強い衝撃を受ける。1938年、同校卒業後、大阪ガス会社に入社。この頃、ロシアの哲学者シェストフの影響でドストエフスキーを読む。また、カール・バルトの神学書を熱心に読み、キリスト教に関心を持ち、大阪の教会でバルトの弟子のエゴン・ヘッセルから受洗。1939年、神学校に進む決心をし、東京の信濃町教会に出席。同年、応召。1945年、ハルビンで敗戦を迎え、ソ連軍に留置。1949年、反ソ連行為のかどで重労働刑25年を宣告され、強制収容所に収容される。1953年、スターリン死去に伴う特赦により帰国し、本格的な詩作活動を展開する。1964年、詩集『サンチョ・パンサの帰郷』でH氏賞を受賞。エッセイ集『望郷と海』はシベリヤ体験を中心に据えた強制収容所文学の傑作である。1975—77年、

日本現代詩人会会長を務める。1977年、風呂場で不慮の死を遂げた¹。

詩「サンチョ・パンサの帰郷」

石原吉郎の代表作であり、第一詩集『サンチョ・パンサの帰郷』の標題詩になった「サンチョ・パンサの帰郷」を見ていきたい。

サンチョ・パンサの帰郷

安堵の灯を無数につみかさねて
夜が故郷をむかえる
みよ すべての戸口にあらわれて
声をのむすべての寡婦

驢馬よ 権威を地におろせ
おとこよ
その毛皮に時刻を書きしるせ
私の権威は狂気の距離へ没し
なんじの権威は
安堵の故郷へ漂着する
驢馬よ とおく
怠惰の未明へ蹄をかえせ

やがて私は声もなく
石女^{うますめ}たちの庭へむかえられ
おなじく 声もなく
一本の植物と化して
領土の壊滅のうへへ
たしかな影をおくであろう

驢馬よ いまよりのち
つつましく怠惰の主権を
回復するものよ
もはや なんじの主人の安堵の夜へ
何ものものこしてはならぬ
何ものものこしてはならぬ

文体分析・構造分析

詩の題名は、石原吉郎の第一詩集名として採用さ

れているから、この詩への作者の思い入れが極めて強いことが分かる。全体は4連で構成されているが、それぞれの連の行数に規則性はない。「驢馬よ」という呼びかけが三度繰り返され、そのつど詩面を引き締めている。それぞれの行は言葉の「贅肉」を削ぎ落として短く、緊迫性を高めている。最後に、「何ものものこしてはならぬ」という命令が念を押すように二度繰り返されている。

この詩は、詩誌『文章倶楽部』1955年4月号に掲載され、第2回詩コンクールで入選4席に選ばれている。石原吉郎がシベリヤから興安丸で日本に帰還したのは、1953年12月13日のことであったから²、帰還後、それほど間を置くことなく作成された詩篇である。従って、シベリヤ体験の「ほてり」を強く身に帯びていた頃の作品である。それにもかかわらず、石原はその体験を生々しく作品に投ずることはせず、その代わりに重層的・複層的な構造をこの詩に施したのである。この詩は少なくとも以下の三層構造を持っている、と考えられる。

第一は、詩名から明らかなように、17世紀に活躍したスペインの作家ミゲール・デ・セルバンテス・サベードラ (Miguel de Cervantes Saavedra, 1547 - 1616) の代表作である『ドン・キホーテ』(原題はEl Ingenioso Hidalgo Don Quijote de la Manchaで「才知あふるる郷土ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ」の意味³) の層である。

第二は、石原吉郎の日本への帰還という層である。石原は、シベリヤで強制労働に服した後、スターリン死去に伴う恩赦によって日本に帰還してきた。

第三は、この詩の底流にあって第一層と第二層を下支えするキリスト教的・聖書的思想の層である。イエスのエルサレム入城が意識されている。

第一の層 『ドン・キホーテ』

ドン・キホーテとは誰か

ドン・キホーテのドン (Don) は、「成人男性個人名の前につける敬称」であり、「もともと貴族に対する敬称であったが、現在では社会的に高い地位にある人だけでなく、一般に親しみ・敬意を込めた敬称としても用いられる⁴」。キホーテ (quijote) は、「(よ

ろいの)もも当て」「(馬の)尻」を意味する⁵。作者セルバンテスは、皮肉と揶揄をこめた命名を意図的にしているのであろう。『ドン・キホーテ』の翻訳者である永田寛定は、「ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ」に注を付し、次のように説明している⁶。

キホーテという語は、元来甲冑の一部で、^{またあて}股当のことだが、セルバンテスがこの語を選んだのは、騎士に^な因みがあるばかりでなく、語尾のオーテという韻感をも利用したのである。イスパニヤ語では、-oteは無恰好に大きくばかげている物の語尾とされる。

続けて、次のようにラ・マンチャ県についても説明をしている⁷。

ラ・マンチャという県はイスパニヤでも最も蒙昧な地方で、住民は頑迷なわからずやとされていたから、ドン・キホーテと名乗る騎士どのには、デ・ラ・マンチャよりも恰好な苗字はないのである。

ラ・マンチャ県は、スペインの内陸部にある。そこには、荒涼とした大地が広がり、オランダから輸入されたという数台の風車が建っている。小説の舞台がそのまま風化せずに、吹き募る風の中でこそ生き残ってきたような錯覚に陥る。

サンチョ・パンサとは誰か

サンチョ・パンサ(Sancho Panza)は、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャの従者である。サンチョという名前は、スペインでは男性に用いられる普通の名前である⁸。姓のパンサは、普通名詞では、「(特に太って張り出した)腹、太鼓腹⁹」を意味するから、作者がサンチョ・パンサの体形をからかっていると考えられる。

主人のドン・キホーテは、甲冑に身を固め、凡馬にその名前が由来する瘦せ馬ロシナンテに騎乗している¹⁰。その辺の経緯を小説は次のように記している¹¹。

〔ドン・キホーテは〕そこで、記憶をあさり想像をはたらかして、つけてみたり、消してみたり、半分にきったり、つぎ足したり、ぶちこわしたり、またでっちあげたりした、おびたゞしい名前ののちに、やっと、ロシナンテとつけることにした。この名前こそ、郷土〔ドン・キホーテ〕の意見では、ひゞきがよく、朗らかで、今の身になる^{アンテス}前^{ロシン}に凡馬だった素性を語るとともに、今の身の、世にありとしある^{ロシン}凡馬^{アンテス}の魁^{アンテス}で首位だということを知らすのだった。

(以下、〔 〕は引用者)

それに対して、従者のサンチョ・パンサは、「振り分けのだんぶくろに革の酒袋までつけた〔名無しの茶色の〕驢馬にまたがって¹²」旅をするのである。

サンチョ・パンサは、「争いをすかぬ、静かな人間¹³」である。幻術に立ち向かうのだと言って暴走しようとする主人のドン・キホーテを引きとめ諷める役目を担った心優しい従者である。彼は主人のように槍や剣や甲冑で身を固めた騎士ではない。彼に戦いを意味する馬は似合わない。彼は、主人から幾度となく「臆病者」と嘲られ¹⁴、「愚か者」と罵られる¹⁵。遂には、「きさまはな、ろばなのじゃ。ろばにそわないのじゃ。きさまの一生が終る時にも、ろばとして終るのじゃ。と申すのはな、きさまがみずからろばだと悟らぬうちに、最期がきてしまうことを確信するからじゃ¹⁶」と決めつけられてしまう。

彼は、物言わぬ驢馬に、時に自分の身の不幸を話し¹⁷、「わしのうれしい友よ」と言って接吻し頬ずりする¹⁸。そして「このわしは驢馬でがすよ¹⁹」と告白することになる。

驢馬は、ヨーロッパではどのような動物として考えられているのであろうか。辞典によって、その手がかりを掴みたい。

()ドイツ語 Esel 口バ。ばかもの、とんま。²⁰

()フランス語 âne ろば。ばか、あほう。²¹

()イタリア語 asino 口バ。愚か者、がんこ者。²²

()スペイン語 burro, burra 口バ。ばか者、間抜け、とんま。強情な人、頑固な人。(忍耐強い)働き者。asno, asna 口バ。ばか、まぬけ。²³

() 英語 donkey ロバ (ass より普通の語で忍耐・とんまの象徴)。ばか者、とんま、頑固者。 ass ロバ。ばか、とんま、がんこ者。²⁴

五か国語ともに、「ばか」「あほう」「間抜け」などの軽蔑と揶揄の意味を含んでいる。そのほかに「強情な人」「がんこ者」の意味もあり、スペイン語では、「(忍耐強い) 働き者」の意味を含む。驢馬は、「奇蹄目ウマ科の哺乳類。肩高一メートル内外で、耳が長く、尾はウシに似る。原種はアフリカノロバで、古代エジプトですでに家畜化されていた。体は小さいが耐久力があり、粗食に耐え、少量の水で生きられる²⁵」動物である。

動作はのろいが、忍耐強く、働き者の驢馬が、軽蔑と揶揄、そして評価の対象ともなっている。主人のドン・キホーテによって、従者のサンチョ・パンサは驢馬に譬えられる。サンチョ・パンサと驢馬は一心同体である。

第二の層 石原吉郎の帰還

サンチョ・パンサの帰郷

そのサンチョ・パンサが帰郷する、ラ・マンチャ県の村へ。彼の帰郷は二度ある。『ドン・キホーテ』の正編の最後の場面と続編の最後の場面である。一度目の帰郷は、日曜日の「まっぴるま」であった。その場面は次のように記されている²⁶。

ドン・キホーテが帰ったときいて、サンチョ・パンサの妻〔テレーサ〕が駆けつけた。この女は、亭主が従士として、郷土〔ドン・キホーテ〕について行ったことを知っていたので、サンチョを見つけるや、最初にたずねたことが、驢馬は無事かどうかであった。サンチョは、驢馬なら、持主よりも元気で帰ったよと答えた。

妻のテレーサが真っ先に聞いたのが、パンサの安否ではなく、驢馬の安否であったことは、極めて象徴的である。二度目の、そして最後の帰郷は、次のように記されている²⁷。

村の入口で、和尚〔司祭〕と得業士〔学士〕

のカルラスコが小さな牧場でお祈りをしているのに出会った。ことわっておきたいのは、サンチョは、茶色のやつ〔驢馬〕のうえ、武具の荷物に鞍掛けがわりに、公爵の館でアリティシドーラがよみがえった晩に着せられた、焰の模様の長袍をかけ、また、驢馬の頭には尖り頭巾をかぶらせていたことだ。世の驢馬で、いまだかつて見たことのないような、これは見事な変身であり、馬飾りであった。

石原吉郎の日本への帰還をサンチョ・パンサのラ・マンチャ県の村への帰郷になぞらえるとすれば、後述するように二度目の帰郷のほうがふさわしい。

しかしながら、岩波版の『ドン・キホーテ』続編(一)は1953年に初版が出版されたが、翻訳者の永田寛定の健康上の都合もあって、その後の出版が停滞し、高橋正武による注の整備がなされて続編(二)が出版されたのは、続編(一)が出版されてから実に22年後の1975年5月であった。永田が死去したのはその2年前の8月である。ましてや続編(三)が高橋正武によって翻訳され発行されたのは、1977年のことであるから、石原がそれらを読んだうえで、詩「サンチョ・パンサの帰郷」を書くことは不可能である。従って、石原吉郎のサンチョ・パンサの帰郷は、正編の最後の場面を念頭に置いてのことである可能性が高い。

高橋正武によれば、邦訳としては、島村抱月・片上伸共訳『ドン・キホーテ(工夫に富める紳士ラ・マンチャのドン・キホーテ)』上下2巻が1915年に植竹書院から、森田草平訳『ドン・キホーテ』上下2巻が1927年と1928年に国民文庫刊行会から出版されているが、どちらも英語からの重訳であった。原典から初の完訳として、会田由訳『ドン・キホーテ(才智あふるる郷土ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ)』の前篇が1960年に、後篇が1962年に筑摩書房から出版されている。また正編だけであるが、進藤遠訳『ドン・キホーテ(英邁なる貴紳ラ・マンチャのドン・キホーテ)』が1951年に河出書房から、堀口大学訳『ドン・キホーテ(奇抜な郷土ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ)』が1965年に新潮社から出版されている²⁸。石原は外

国語に堪能であったから、外国語版でこの小説を読んだという可能性も否定はできない。

詩人の岡本勝人は次のような示唆に富む記述をしている²⁹。

石原吉郎の第一詩集『サンチョ・パンサの帰郷』は、一九六三年、彼が四十八歳の時に出版された。この詩集は題名が語るように、シェイクスピアと同時代を生きたセルバンテスの体験した人生との同一性を抜きにしては読むことができない。セルバンテスは、二十四歳の時、トルコとイスパニアが地中海の制海権を争ったレパントの海戦に加わり、胸に二ヶ所の傷を受け、左手は魔物のように変形していた。その後も転戦し、帰国時には海賊に捕らえられて五年間の奴隷生活を余儀なくされた。救出された彼は、国家から何の報償もなく、貧しさのなかで生きていかなければならなかった。その時、彼はいまだ詩人でもなければ、小説家でもなかった。

「レパントの海戦」とは、1571年10月にキリスト教連合軍とトルコ艦隊との間でなされた戦いのことで、キリスト教連合軍の圧倒的な勝利で終わった。しかし、セルバンテスは、「敵の凶弾を受けて重傷を負い、左手が利かなくなったものの、以後、名誉の負傷を誇り続けた³⁰」という。

セルバンテスの戦争体験は、例えば『ドン・キホーテ』に出てくる次のような台詞に反映していると見ることができないであろうか。法律を犯して軍船で漕刑囚そうけいしゅうとして実刑を受けている男について、その仲間が証言する、「お武家様(ドン・キホーテのこと)、もがいて歌うたうとは、不浄仲間の符牒でね、拷問に音をあげることですよ。この浮かばれねえ男は、拷問にあつてね、てめえの罪の四つんばい師、つまり馬ぬすとうを白状したんです。その白状によって、漕刑六年のほかに、むち二百を言い渡され、その方はもう背中にもらってるんです³¹」と。

当時の軍船は通常は風と帆で走ったが、「港への出入や、風のない時の操作のため、船の両側へ多数の櫂を取りつけてあり、これを囚人に漕がせたものである。軍船はすなわち刑務船であり、その漕ぎ手は

漕刑囚であった³²。」

石原が自分とサンチョ・パンサを同定するには、次のような同人誌発行までの経緯を考慮すべきであろう。

同人誌『ロシナンテ』

『石原吉郎全集』の「年譜」によれば、「十二月二十五日 文章倶楽部東京支部の忘年会 於飯田橋・野々山登志夫宅。この集まりで詩誌発行のその誌名〔ロシナンテ〕が決まる。誌名〔ロシナンテ〕は石原吉郎第一詩集のタイトルに予定していたもの³³」(〔 〕は「年譜」作成者)という。『文章倶楽部』とは、『現代詩手帖』の前身の文芸投稿誌であり、思潮社の社長になった小田久郎が編集の責任を負っていた。

石原は、自分の第一詩集の題名に温存していた「ロシナンテ」という名称を同人誌に譲ったということである。石原はその辺の事情に直接にはふれず、次のように記している³⁴。

その年の暮れ、本郷のそば屋の二階で「文章倶楽部」の投稿家の集りがあった。いずれも二十代の若者ばかりで、私のような年代は他にはいなかったが、とにかく泥酔して「カチューシャ」を歌ったということなので、私としては例外的に溶けこんだらしい。翌年、これらの人たちのなかから、詩の投稿家が集って詩誌「ロシナンテ」を発刊した。

『ロシナンテ』には、好川誠一、勝野睦人、粕谷栄一、小柳玲子らが同人として参加している。石原は自分より10歳以上も離れた、これらの若い同人に対して、まぶしいほどの期待と希望を持ったことであろう。自分の第一詩集に予定していた「ロシナンテ」という名称を惜しげもなく同人たちに提供しているのである。『ロシナンテ』は、19号まで発行され、1959年に廃刊になった。

石原が最初は、「ドン・キホーテ」でもなく「サンチョ・パンサ」でもなく、「ロシナンテ」を選んでいったことは、重要である。「凡馬」に由来する「ロシナンテ」と言えども、古来、馬は戦いの象徴であった³⁵。

たとい誌名検討の折、石原自身が同人誌のために、進んで「ロシナンテ」という取って置き名称を提案したとしても、以後、自分の詩集に「ロシナンテ」という名前は使用できなくなった。石原は、好むと好まざるとにかかわらず、また意識すると意識しないにかかわらず、主役で長身瘦躯のドン・キホーテと一心同体であるロシナンテから、脇役で短身小太りのサンチョ・パンサと茶色の名無しの驢馬へと視線を下げなければならなくなったのである。この視線の移動こそ、その後の石原にかけがえのない視点を与えることになる。

語句の吟味

詩「サンチョ・パンサの帰郷」には、重要な語句が用いられている。それは、「権威」「時刻」「怠惰」である。「権威」については、後述することになるが、「時刻」は石原の詩に頻出する重要な言葉である。ギリシャ語には、「定められた時。好機、機会」を表すカイロス (kairós) と「時間」を表すクロノス (chrónos) の区別がある³⁶。聖書学者の大貫隆は、使徒パウロの時間論を論じる中で次のように区別している、「カイロス」は「クロノス」が線分的な長さをもつ時間を意味するのに対して、時の点、すなわち「時機」を表す³⁷。石原が、その事を意識して用いていると断定はできないが、少なくともカイロスに近い意味を含む「時刻」は、緊張感を漲らせた一期一会の時を表している。「時間」のような締まりのない時の長さとは、きっぱりと訣別しているのである。

「怠惰」は、驢馬との関わりで引き出されてきた言葉であろうが、「愚鈍・魯鈍」を驢馬から想起できても、「怠惰」と驢馬は結び付きにくい。石原はこの「怠惰」という言葉にどのような意味合いを付託したかったのであろうか。日本におけるこれからの自分の生活を暗示したかったのかもしれない。「一本の植物と化して」の主語は「私」であるが、第一義的にはサンチョ・パンサであり、第二義的には石原吉郎である。「たしかな影」とは、焦土と化した祖国日本に対する生きた証しとしての痕跡を表わしているに違いない。

第三の層 キリスト教的・聖書的思想

この詩の底流にある聖書的・キリスト教的思想の層を読み解いていきたい。

安西均の解釈

詩人の安西均は、次のようにこの詩を解釈している³⁸。

詩集『サンチョ・パンサの帰郷』というタイトルは、じつはこれに収録した同題の作品からとったものだ。石原はたぶん、シベリアから敗戦日本への帰国（召集による入隊からかぞえると十四年ぶり）を サンチョ・パンサの帰郷になぞらえているようだが、しかし、この作品はかなり難解である。ただ、「すべての戸口にあらわれて / 声をのむすべての寡婦」や「石女」や、「領土の壊滅」といった詩語は、社会の不毛のイメージを投影しているのだろう。

安西も、石原の日本への帰還をサンチョ・パンサの帰郷に重ねて解釈している。「寡婦」や「石女」という詩語を「社会の不毛のイメージを投影している」と解釈しているが、一歩進めて言えば、新しい生命を再び生み出すとは到底思えない敗戦国日本の壊滅状態を指していると考えべきであろう。

安西は「権威」にも率直にふれながら、次のように言う³⁹。

この詩のなかで「驢馬よ 権威を地におろせ」は最も鋭い一行だが、これは口バの「主人」すなわち「私」への命令であろう。一片の権威も持たないはずの者がそれを捨てるということは、矛盾しているようだが、そうではあるまい。

なぜなら、権威は強者とか支配者の側にだけあるのではないからだ。たとえば弱者が強者を、被支配層が支配層を、被差別者が差別者を、平等たらんとして 告発 するとき、つねに何らかの権威を杖にしているのである。

「権威を地におろせ」と言うとき、石原はそう

いう意味での権威の荷物を、半キログラムといえども自分の肩には負うまいと決意しているかのようだ。詩の最後の「何ものものこしてはならぬ」というくりかえしも、それに響き合う二行であろう。(中略)

なお聖書をよく読んでいた石原のことだから、この詩を書くとき、イエスが生涯の最後、ロバに乗ってエルサレムに入ったという場面が、頭に浮ばなかったとは言い切れまい。むろん、このイエス伝承に引きつけすぎて読むのも不当ではあるが。

権威 についての卓見である。また安西は、この詩からイエスの生涯の最後の場面を遠慮がちに汲み取っている。

石原が、サンチョ・パンサに自己を投影するためには、『ドン・キホーテ』を知識として知っているだけでは不十分である。この小説の底流にあるキリスト教や聖書の思想を理解していなければならなかったはずである。ドン・キホーテがサンチョ・パンサに助けられて驢馬に乗せられる場面は、聖書の「良いサマリア人」を髣髴とさせるし⁴⁰、サンチョ・パンサの台詞「わしはただか生まれ、ただかであるだ、損もとくもねえよ⁴¹」は、ヨブ記のヨブの祈りの言葉に通じる⁴²。また、美しい乙女アルティシドーラのよみがえり⁴³は、キリスト教の重要な教義である復活を取り扱っている。

正編でも続編でも、多くの村人に出迎えられたこと、ドン・キホーテもサンチョ・パンサも夢破れて帰郷することは共通している⁴⁴。石原が読まなかった蓋然性が高い続編(三)の最後の場面には、サンチョ・パンサが帰郷する時、咎うたれたこと⁴⁵、ドン・キホーテがやがて羊飼いになろうとしていることが加えられている⁴⁶。その他に、驢馬について、かなり詳細な記述がなされているのである⁴⁷。

結論——驢馬の権威

石原は、岡本が指摘するように、セルバンテスと自分を同定していた。そしてサンチョ・パンサだけではなく、彼と一心同体である驢馬と自分を同定し

ていた。サンチョ・パンサは、主人のドン・キホーテに揶揄され、罵倒され続けた。その罵倒のために使われた言葉こそ、愚か者や臆病者の代名詞である「驢馬」であった。サンチョ・パンサはその驢馬に限りない友情と親しみを感じていたのであり、「このわしは驢馬でがすよ」と述懐するまでになる。

詩「サンチョ・パンサの帰郷」に戻って考察を進めよう。

そこに登場する驢馬は、第一義的にはサンチョ・パンサを背負った驢馬であり、第二義的には石原をシベリヤから日本へ運んできた何ものかである。その驢馬が、「権威を地におろせ」と命令されている。愚鈍・魯鈍の代名詞である驢馬にどのような権威があると言うのであろうか。

安西がいみじくも述べた「権威は強者とか支配者の側にだけあるのではないからだ。たとえば弱者が強者を、被支配層が支配層を、被差別者が差別者を、平等たらんとして告発するとき、つねに何らかの権威を杖にしているのである」という解釈を一步進めてみたいのである。

私は、この詩の背後に、積極的にイエスのエルサレム入城を読み取るべきであると考え。イエスのエルサレム入城は、旧約聖書の預言に従ってなされた福音書に記されている⁴⁸。その預言はゼカリヤ書9章9節にある。石原が好んで読んでいた通称「文語訳聖書⁴⁹」では次のように記されている、「彼はたゞしくたゞしくすくひすくひを賜り柔和にして驢馬に乗る即ち牝驢馬の子なる駒に乗るなり」。

驢馬は、旧新約聖書の重要な場面にたびたび登場してくる。『聖書動物事典』の著者であるP. フランスは驢馬について次のように述べている⁵⁰。

ロバに乗った最も有名な旅は、キリストが預言の成就としてエルサレムに入城した時のものである。その場面はよくさし絵に使われ、話題とされてきたが、また同じくらいよく誤解もされてきた。それというのは、キリストのエルサレム入城が、柔和さとへりくだった心の模範、また謙虚さを公けに表わす行為として、たびたび取り上げられているからである。しかしロバ

は、上の例に見られるようにきわめて尊重すべき乗り物で、よく使われた。

マタイによる福音書 21 章 7 節の物語の要点は、キリストが謙虚さを示されたということではなくて、キリストが平和の人としておいでになったということにある。ウマは戦いの動物であり、征服者の乗り物であった。ロバには地位の高い人たちが乗ったが、戦いの際に軍事的指導者たちが乗るものではなかった。したがってキリストは、征服者としてではなく、平和のおとずれをもたらす方として、おいでになったのである。

イエスは平和の象徴である驢馬に乗り、民衆の歓呼に応じてエルサレムに入城する。人々の重荷を負うというイエス⁵¹、そのイエスという重荷を驢馬は身をもって背負ったのである。驢馬の権威はここにこそある。イエスという裏返しの権威を背負った矜持にも似た自負心である。驢馬と同定される石原には、シベリヤの強制収容所において、まがりなりにも日本の戦争責任を自分の全身で果たしてきたという誇りがあった。石原は、その自分にその権威を地におろせと命じているのである。

石原の聖書に関する「実力」は、知識や教養の域をはるかに超えている。むしろその生き方や実存に関わっている。石原が、詩集名として温存していた「ロシナンテ」からサンチョ・パンサの驢馬に視線をおろした時から、シベリヤの自分をも相対化しうる視点を獲得することができた。その視線の移動こそ、その後の作品に決定的な影響を与えずにはおかなかった。

サンチョ・パンサと名無しの驢馬に導かれて、石原の作品の深層から見えてくるキリスト教や聖書の思想は、驚くほど幅広く奥深いと言わなければならない。

¹ 『石原吉郎全集』、花神社、1980年、「自編年譜」、507—516ページ、「年譜」(小柳玲子・大西和男作成)、517—532ページ。

² 同上、「年譜」、519ページ。

³ 『クラウン西和辞典』、三省堂、2006年、Ingenioso の項。

⁴ 『クラウン西和辞典』、don の項。

⁵ 同上、quijote の項。

⁶ セルバンテス著、永田寛定訳『ドン・キホーテ』正編(一)、岩波書店、1948年、273ページ。

⁷ 同上。

⁸ 『クラウン西和辞典』、Sancho の項。

⁹ 同上、panza の項。

¹⁰ 『ドン・キホーテ』正編(一)、114ページ。

¹¹ 同上、117ページ。

¹² 同上、174ページ。

¹³ 『ドン・キホーテ』正編(二)、13ページ。

¹⁴ 同上、130ページ。

¹⁵ 同上、180ページ。

¹⁶ 『ドン・キホーテ』続編(二)、64ページ。

¹⁷ 『ドン・キホーテ』正編(二)、163ページ。

¹⁸ 同上、288ページ。

¹⁹ 同上、182ページ。

²⁰ 『独和大辞典』、小学館、1985年、Else の項。

²¹ 『クラウン仏和辞典 第2版』、三省堂、1984年、âne の項。

²² 『伊和中辞典』、小学館、2004年、asino の項。

²³ 『クラウン西和辞典』、三省堂、2006年、burro, burra, asno, asna の項。

²⁴ 『ジーニアス英和辞典 第3版』、大修館書店、2001年、donkey, ass の項。

²⁵ 松村明編『大辞林』、三省堂、1988年、「驢馬」の項。

²⁶ 『ドン・キホーテ』正編(三)、327ページ。

²⁷ 『ドン・キホーテ』続編(三)、328ページ。

²⁸ 同上、406—407ページ、「あとがき」。

²⁹ 「石原吉郎——北の海の交響曲」『詩学』1998年12月号、詩学社。

³⁰ 『世界日本キリスト教文学事典』、教文館、1994年、「セルバンテス」の項。

³¹ 『ドン・キホーテ』正編(二)、116ページ。

³² 同上、319ページ。

³³ 『全集』、「年譜」(小柳玲子・大西和男作成)、519ページ。

³⁴ 『全集』、「私の詩歴——『サンチョ・パンサの

-
- 帰郷』まで」、389ページ。
- ³⁵ P.フランス・文、平松良夫訳『聖書動物事典』、
教文館、1992年、「ウマ」の項。
- ³⁶ 玉川直重著『新約聖書ギリシア語辞典』、キリス
ト新聞社、1978年。
- ³⁷ 大貫隆著『イエスの時』、岩波書店、2006年、
192ページ。
- ³⁸ 安西均編著『石原吉郎の詩の世界』、教文館、1
981年、97ページ。
- ³⁹ 安西均編著『石原吉郎の詩の世界』、98ページ。
- ⁴⁰ 『ドン・キホーテ』正編(一)、151—152
ページ。ルカによる福音書10章25—37節。
- ⁴¹ 『ドン・キホーテ』正編(二)、165ページ。
- ⁴² ヨブ記1章21節。
- ⁴³ 『ドン・キホーテ』正編(三)326—327
ページ、続編(三)309ページ。
- ⁴⁴ 『ドン・キホーテ』正編(三)326—327
ページ、続編(三)326—330ページ。
- ⁴⁵ 『ドン・キホーテ』続編(三)318ページ。
- ⁴⁶ 同上、332—333ページ。
- ⁴⁷ 同上、328—329ページ。
- ⁴⁸ マタイによる福音書21章1—11節、マルコ
による福音書11章1—11節、ルカによる福音
書19章28—38節、ヨハネによる福音書12
章12—19節。
- ⁴⁹ 『舊新約聖書』、日本聖書協会、1975年。
- ⁵⁰ 前掲『聖書動物事典』、「ロバ」の項。
- ⁵¹ マタイによる福音書11章28—30節。

(Received : January 10, 2007)

(Issued in internet Edition : February 1, 2007)